

Summer Session 2018 : Modification

原 めぐみ

1. はじめに

国際教養学部国際教養学科は2017年から新カリキュラムをスタートし、1年終了時に全員留学に参加することを原則義務付けした。全員留学の準備として、留学直前の秋学期に行われる事前演習と夏休み中（8/20～8/31）に行われるサマーセッション（国内留学）が段階的にカリキュラムに配置されている。学生はオーストラリアで語学学校に通いながらホームステイをするプログラムか、セブで寮生活をしながらマンツーマンの授業を受講するプログラムのいずれかに参加することになっている。それら2つの留学先の環境を想定し、現地で使用する英語表現の練習をする場がサマーセッションである。本稿では2018年に行われたサマーセッションについて述べる。2017年からスタートしたサマーセッションに関しては、本論集内のThorntonによる“Summer Session 2017 : Initiation”を、新キャンパスで行った2019年のサマーセッションに関してはMillerの“Summer Session 2019 : Innovation”を参照していただきたい。

2. サマーセッションの概要

2. 1 ディプロマ・ポリシーおよび目標

国際教養学科のディプロマ・ポリシーには、「海外体験を通して高い英語運用力を身に付け、同時に異文化の受容と自国文化の理解を深めることができる。その上で、英米の歴史・文化・文学、及び英語学の知識を獲得し、英語教育の現場等においてそれらを応用的に用いることができる。加えて国際的な観点から、総合的かつ相対的に日本文化を眺めることができる。」とあり、サマーセッションはこのポリシーと強く関連している。

サマーセッションの到達目標は以下の3つである。①留学中に使用する表現を書いたり話することができる。②コミュニケーションタスクを情報共有しながら完成することができる。③日本文化を再認識し、留学中に体験する異文化に対し理解を深めることができる。

2. 2 授業概要

1日90分授業×3コマを2週間行い、午前中は留学時に必要となる10のトピックについて扱った。例えば、日本文化の紹介方法や自分の家族や出身地の表現をアクティビティで学び、コミュニケーションの上達を目指した。午後は2つの異なったグループプロジェクトに取り組んだ。午後の授業

は2週間通して同じ教員が担当し、India、Nigeria、Netherlands、Philippines、BrazilとEFL英語話者の多い国の名前をつけ、そのクラスをホームルームクラスとした。5人の教員（学科専任教員3人、基盤機構所属教員1人、非常勤講師1人）が担当したが、5人の内、ネイティブスピーカーが3人、日本人が2人であった。また日本人教員2人はどちらも学科教員であり、春学期の英語科目においても対象学生を担当しているため、学生のフォローが行いやすい体制であった。教員間の事前準備や情報共有はMicrosoft Teamsを通じて行った。学生は普段と異なったメンバーと交流することもサマーセッションの目的の一つでもあるために、クラス編成は通常の英語必修クラスの4クラス編成ではなく、TOEICスコアを元にアベレージの1クラス30人前後の5クラスに編成した。

2. 3 午前中授業のトピック

一人の教員が毎日同じトピックを教え、教室を移動するという授業スタイルを実施した。学生は毎日違う先生と違うトピックを1限目にインプット中心に学習し、2限目にはそのトピックに関するアウトプットを行った。教員別のトピックを表1に示す。すべての授業内資料と授業外課題を冊子化した「サマーセッション冊子」を初日に学生に配布した。筆者が担当した1週目の“Talking about Interests（自己紹介）”の授業では、ホームステイ先や語学学校で最初に行われる自己紹介やその後の会話を想定した表現を学んだ後、相手に対して即時に質問ができるようなアクティビティを行った。2週目の“Telling opinion（意見を述べる）”では、社会問題に対する自分の意見を言う際の表現を学習した後、実際に「2020年に行われる東京オリンピックに大学生がボランティアとして参加すべきかどうか」などのトピックについてディベートを行った。

表1：教員別トピック

	Teacher 1	Teacher 2	Teacher 3	Teacher 4	Teacher 5
week 1 personal	Talking about trip (vacation)	Talking about Japanese culture	Talking about families and home town	Talking about University life	Talking about Interests (likes and dislikes)
week 2 global and society	Travel Tech	Japanese society	Families around the world	Part-time jobs and career	Telling opinion

2. 4 午後のグループプロジェクト

午後の2つのグループプロジェクトはTask-based Language Teaching（以下TBLT）に基づいてデザインされた。TBLTのtaskとはEllis（2003）の定義によると、「タスクは最終課題を達成するために実践的に言語を処理することが求められる作業計画である。タスクは、その最終課題を完成するために正確あるいは適切な意味のやりとりがあったかどうかで評価される。（筆者訳）」さらにタスクの必須条件としてEllis（2003）は以下の6つを挙げている。

- 1 A task is a work plan. (作業計画である)
- 2 A task involves a primary focus on meaning. (意味に焦点をおいた活動である)
- 3 A task involves real-world processes of language use. (実生活の言語使用を含む)
- 4 A task can involve any of the four language skill.
(4技能すべてあるいはいずれかを用いて行われる)
- 5 A task engages cognitive process. (認知プロセスが要求される)
- 6 A task has a clearly defined communicative outcome.
(意味のやりとりの成果が示されている)

これら6つを含んだ1週目のグループプロジェクトの課題は、ポスター発表であった。海外から日本に来る旅行者に下記の8つのテーマから1つを選び、旅行プランを作るというプロジェクトである。資料1、資料2に学生がポスターを前に発表している様子を示す。

- | | |
|--------------------|---|
| テーマ名： 1. Spiritual | 5. History |
| 2. Strange | 6. International Japan (Kobe Chinatownなど) |
| 3. Outdoor | 7. Sport |
| 4. Otaku | 8. Budget |



資料1：International Japanをテーマにしたポスター発表



資料2：Budget tripをテーマにしたポスター発表

2週目のグループプロジェクトは、日本の学生が留学した設定、あるいは留学生が日本に来た設定のどちらかで劇をつくることを課題とした。学生は以下の4つのシチュエーションから一つ選び、グループごとに場所、配役を設定し、台本づくりから、小道具なども用意し演じた。4日目の授業では各クラス内で学生の投票により優勝グループを決定した。筆者の担当クラスで優勝したグループはシチュエーション2のHappy Eventを選び、ホストファミリーがサプライズで誕生日を祝ってくれるというシチュエーションのロールプレイを行ったグループこのグループは5日目の最終日に1年生全員の前で同じロールプレイを披露した。資料3に合同授業での発表の様子を示す。この場面はホストファミリーにお礼の手紙を読んでいる場面である。

4つのシチュエーション： 1. Accident 3. Misunderstanding
2. Happy Event 4. Argument



資料3：合同授業でホストファミリーのロールプレイをしている様子

2. 5 評 価

評価は授業参加度40%、ポスター発表15%、ロールプレイ15%とし、サマーセッションの性質上積極的に授業やプロジェクトに参加したかどうかを中心に評価した。プロジェクトに対する評価は全クラス共通のループリックを用いて行った。共通のループリックについては本論集内のThorntonを参照していただきたい。授業で新たに学んだ単語や使用した表現を定着させるために授業外課題を毎日課し、評価全体の30%とした。

3. 2017年度からの変更点

3. 1 午前中のトピックを変更

2018年度は1週目のトピックと2週目のトピックを連動させるため、初年度のトピックの半分を変更した。初年度は留学時に使用しそうなトピックをランダムに10個選び行ったが、2018年度は同じトピックでも1週目は自分自身に関する事、2週目は社会や世界の事になるようにトピックを配

置した。例えば、家族やホームタウンについてのトピックでは1週目は自分の家族や出身地について語ることができるような課題を行い、2週目は世界の家族について重点的に扱った。

そもそもサマーセッションは、全員留学の準備段階として設定されているが、サマーセッションが行われる9月と実際に留学に出発する2月まで時間が離れているため、初年度に行った“Shopping”、“Homestay”、“Conversation skills”、“Customs & Etiquette”は秋学期の留学事前演習の授業で扱うことにした。また初年度に行った“World English”は、90分×2コマで扱うにはトピックとして大きすぎると考え2018年度では取り扱わなかった。次年度の2019年度ではトピックの変更を行う必要が無かったことから、2018年度のトピック選定は適切であったと思われる。

3. 2 オンライン課題

2017年度は、サマーセッション2週間分の授業内資料と授業外課題を冊子化した「サマーセッション冊子」に授業外課題を直接書き込む形式で課題を課していたが、午後のプロジェクト中に教員が評価を行い学生に冊子を返却しないと、学生が冊子を家に持ち帰り宿題ができないという問題があった。教員は短い時間内に前日に担当した学生の冊子を集めて評価し、成績を転記し、それらをホームルームクラスへ返却する必要があったため、課題の確認に十分な時間を割くことができなかった。2018年度は課題の締め切りを授業当日の23:59に設定しオンライン上のMicrosoft Formsで提出させた。実際の授業外課題を資料4に示す。教員は添削する時間に制約されることや評価を転記する必要もなくなった。また学生はスマートフォンを使用し、帰宅の途中でも課題が行えるようになった。

質問	回答 35
1. What team are you on? * ☐ Team Brazil ☐ Team India ☐ Team Netherlands ☐ Team Nigeria ☐ Team Philippines	
2. Write five sentences using five words you learned today. (5 点) 回答を入力してください	
3. Write your self-introduction using the expressions you learned in this session in a paragraph. (Write 100 words or more) (10 点) 回答を入力してください	

資料4：授業外課題例

3. 3 評価手順

昨年度はMicrosoft Teams上でエクセルシートを全教員で共有し評価を入力していたが、最終日直前になり不具合が起り、全員がもう一度数値を入力し直すことになった。その教訓から、2018年度は教員一人ひとりがエクセルのシートに評価を入力し、代表教員に送り、代表教員が全員のシートを統合した後、学生の成績について議論を行った。

4. サマーセッション振り返り調査の結果と考察

サマーセッション最終日にMicrosoft Formsを使用し、振り返りとして3つの自由記述質問項目からなるアンケートを行い、128の回答があった。3つの質問を以下に示す。

1. What did you learn during the Summer Session? (サマーセッションでは何を学びましたか?)
2. Summer Sessionを振り返って一番頑張ったところはどこですか。
3. 秋学期に向けて、自分の英語学習で一番改善したいところはどこですか。

質問項目1 “What did you learn during the Summer Session?” に関しては全員が英語で回答した。他2つの質問に対しては、9割の学生が日本語で回答し、1割の学生が英語で回答した。質問項目1に対する全体の記述内容をまとめると、コミュニケーションの大切さを学んだ、英語学習継続の必要性を再認識した、自分の英語力のなさを自覚した、という内容が散見された。

質問項目1に対する学生の実際の記述回答を以下に示す。

学生A : “I learned the importance of learning English. I practiced every day for presentation. I had preliminary exercises and homework for the next day every day. It was a very good experience for me.”

学生B : “I think best important thing is attitude of class. I try to speak more English in my life.”

学生C : “Even in the hot we could learn a lot by going for two weeks. I would like to make use of what I learned in my study abroad.”

質問項目2 「Summer Sessionを振り返って一番頑張ったところはどこですか。」に関しては、「頑張ろうとしたが〜できなかった」などの否定的な回答は一つもなく、学生の回答は、2週間の達成感を表現したものが多かった。質問項目2の回答に含まれた語の回答に出現する単語の頻度を求めるため、テキストマイニング用ソフト「KH Coder」を利用した。頻出語リストを表2に示す。頻出順リストからアウトプットに関する「話す」、「劇」、「プレゼン」、「発表」、「使う」という

語が出現回数の上位を占めていることがわかる。普段の英語の授業と違い、サマーセッションでは、留学のことも意識しながら自ら e 英語で話していくという積極性や態度を養えたことがうかがえる。「宿題」という語も上位にきており、毎日授業当日に宿題を提出することが頑張ったという実感につながったことがわかる。

表2：サマーセッションで一番頑張ったところに対する回答の頻出語

抽出語	出現回数
英 語	34
頑 張 る	33
宿 題	20
授 業	19
話 す	16
グループ	12
劇	11
先 生	10
プレゼン	9
出 席	9
発 表	8
毎 日	8
使 う	7

質問項目2に対する学生の実際の記述回答を以下に示す。

学生D：「劇のセリフとプレゼンの内容を考えることです。他にもディベートが大変でしたが、頑張りました。」

学生E：「英語を聞いて話して書いてすべて英語だけれども、与えられた機会を無駄にしないように、反応を返すことに努めたところが一番の頑張りで。」

学生F：「毎日、普段の授業より発言したり、グループ活動に積極的に参加した。これを今後の授業にも繋げていきたいです。」

質問項目3「秋学期に向けて、自分の英語学習で一番改善したいところはどこですか。」の回答に出現する単語の頻度と抽出語同士のつながりを可視化するために「KH Coder」の「共起ネットワーク」機能を利用し、上位15位以上の語で「共起ネットワーク」を作成したものを図1に示す。頻度の多い語は円が大きくなり、円を結ぶ線の濃さは共起関係の強さを表している。図1から読み取れることは、まず図の中心に位置し最も大きく描かれているのは「英語」と「単語」である。「英語」と関係が強いのは「話す」であり、「単語」と関係が強いのは「覚える」である。これらに着目すると、秋学期は4技能中「話す」ことに重点をおきたいということがわかる。春学期は話すことを積極的に行っていなかったということやサマーセッションを通し語彙力の無さを自覚したことは、サマーセッションでの経験が自分自身の英語学習や英語力を振り返る機会になったこともわかる。

質問項目3に対する学生の実際の記述回答を以下に示す。

学生G：「恥ずかしがったり、間違うのを恐れて英語を話さないんじゃないくて、もっと積極的に話すことがいいことだと思ったのでそこを改善したいです。」

学生H：「春学期はE-COにほとんど行かなかったので秋学期は積極的に行って、英語学習に役立てたいです。」

学生I：「普段の学習生活を見直し、海外短期留学に向けて少しでも準備し、快適に過ごせるようにする。」

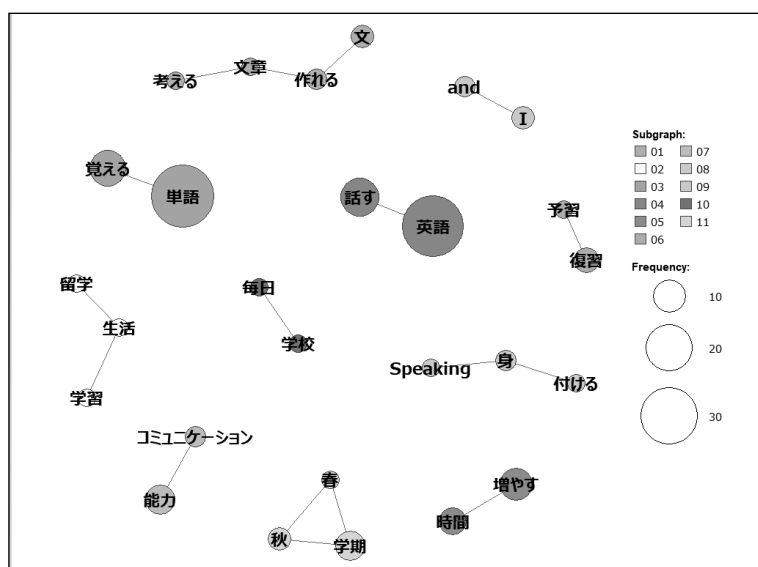


図1：「秋学期に向けて、自分の英語学習で一番改善したいところはどこですか。」の記述回答から上位15位までの抽出語による共起ネットワーク図

5. 課 題

学生の振り返り調査からは、サマーセッションに対する変更点などの要望はみられなかったが、筆者が考えるサマーセッションの課題は大きく分けて二つある。一つはコミュニケーションが中心の授業内容にもかかわらず、1クラスの数が多いことである。現状は1クラス30人程度の5クラス編成であるが、せめて25人の6クラス編成、理想は20人前後の7クラス編成である。教員数を増やすことで、個々の学生の発言の機会が増え、教員も学生の質問に対応しやすくなる。もう一つの課題は、サマーセッションと春学期・秋学期の英語の授業や留学事前演習との連携が十分にできていないことである。留学準備の一部であるはずのサマーセッションが、それだけ浮いた存在になってしまっているのが現状である。そのためにはサマーセッションを担当していない学科教員にもサマーセッションの内容を共有し、留学事前演習などでサマーセッションの内容にも触れながら授業

を進めていく必要がある。授業だけでなく、今後はE-CO（English Café at Otemon）との連携も行っていきたい。例えばサマーセッションで扱ったトピックの続編をE-COのワークショップなどで行うことで同じトピックのより深い内容やバリエーションを継続して秋学期でも学ぶことが可能になる。

参考文献

Ellis, R. (2003). *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.